

慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス
研究開発ラボラトリ
Report of 2015

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開設：2012年3月1日

代表者：小松 浩子（看護医療学部教授）

関連 Web Site：<http://www.kri.sfc.keio.ac.jp/japanese/laboratory/nursing.html>

連絡先：慶應義塾大学看護医療学部小松研究室

本ラボラトリーは、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(2) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore)、をめざすものである。

■メンバー

小松 浩子（看護医療学部 学部長）	ラボラトリー・リーダー	がん看護実践質保証研究開発
武田 祐子（看護医療学部 教授）		遺伝看護実践研究開発
太田喜久子（看護医療学部 教授）		高齢者看護実践研究開発
野末 聖香（看護医療学部 教授）		精神看護実践研究開発
藤井千枝子（看護医療学部 教授）		看護技術研究開発
宮脇美保子（看護医療学部 教授）		倫理的看護実践研究開発
小池 智子（看護医療学部 准教授）		ベストプラクティス先導ナース開発研究
小山友里江（看護医療学部 准教授）		がん看護実践質保証研究開発
福井 里佳（看護医療学部 准教授）		倫理的看護実践研究開発
福田 紀子（看護医療学部 准教授）		精神看護実践研究開発
矢ヶ崎 香（看護医療学部 准教授）		がん看護実践質保証研究開発
新幡 智子（看護医療学部 専任講師）		がん看護実践質保証研究開発
朴 順禮（看護医療学部 専任講師）		看護実践研究開発
井ノ下 心（看護医療学部 助教）		がん看護実践質保証研究開発
小澤 麻美（看護医療学部 助教）		倫理的看護実践研究開発
笥 亮子（看護医療学部 助教）		精神看護実践研究開発
小林 梢（看護医療学部 助教）		倫理的看護実践研究開発
佐藤 美樹（看護医療学部 助教）		看護実践研究開発
仙波 美幸（看護医療学部 助教）		がん看護実践質保証研究開発
高畑 和恵（看護医療学部 助教）		看護実践研究開発
瀧田 結香（看護医療学部 助教）		看護実践研究開発
中尾真由美（看護医療学部 助教）		がん看護実践質保証研究開発
古市 朋子（看護医療学部 助教）		倫理的看護実践研究開発
真志田祐里子（看護医療学部 助教）		高齢者看護実践研究開発
緑川 綾（看護医療学部 助教）		精神看護実践研究開発
増谷 順子（SFC 研究所 上席所員）		高齢者看護実践研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることも力を注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(1) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の3つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボト리의主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボト리의根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者のQOLの向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探索する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

造血器腫瘍に対する看護師の精神的ケアへの 困難感と学習ニーズに対する調査

野末 聖香 慶應義塾大学看護医療学部 教授
福田 紀子 慶應義塾大学看護医療学部 専任講師
笥 亮子・緑川 綾 慶應義塾大学看護医療学部 助教
宇佐美しおり 熊本大学大学院生命科学研究部 教授
鎮目美代子 慶應義塾大学病院 看護部長
近藤 咲子 慶應義塾大学病院 看護師長
内田 智栄 慶應義塾大学病院 主任
河野佐代子 慶應義塾大学病院 精神看護専門看護師

A. 目標

平成 26 年度に実施した看護師への予備的聞き取り調査をもとに、患者の抑うつ状態のアセスメントとケア能力を高めるための看護師を対象とした教育プログラムを開発し、プログラムの有用性、実践への適応可能性について評価を行う。

B. 計画および実施過程

平成 26 年度に実施した予備調査に基づき、『抑うつ状態にあるがん患者をケアする看護師のための教育プログラム』を開発した。教育プログラムの学習目標は、表 1 に示した通りである。教育内容として、①抑うつ状態の理解とアセスメント (1.5 時間)、②抑うつ状態にある患者の看護ケア (1.5 時間)、③アサーションと傾聴スキル (1.5 時間) ④ロールプレイ (1.5 時間) とした。教育プログラムの評価は、実施前、実施直後、実施 1 ヶ月の 3 時点で行い、質問紙調査による評価を行った。評価は、①学習目標の達成度 (アセスメントのための知識の習得度、看護ケアに関する知識の習得度、アセスメントの困難感、患者とのコミュニケーションの自己効力感)、②臨床実践への応用可能性 / 有用性 (講義のわかりやすさ、学習ニーズとの合致、臨床実践への応用可能性、ロールプレイの有用性)、③教育プログラムの構造 (開催時間、回数など) から行った。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

本年度の計画に基づき、教育プログラムの開発、実施、評価を行った。研究対象は、慶應義塾大学病院で造血器腫瘍患者の入院病棟に勤務する部署配属 2 年目以上の看護師であった。1 日コース (6 時間) の教育プログラムを 5 回、実施し、1 回 4～7 名、合計 23 名の看護師が教育プログラムを受講した。実施前、実施直後、実施 1 ヶ月後の 3 時点すべての質問紙に回答した対象者は 10 名であった。

受講前に比較すると受講直後、受講 1 ヶ月後の知識の習得度得点、自己効力感の得点は有意に高く、実施直後と実施 1 ヶ月後の比較では、有意な差は認められないものの得点が低くなる傾向が認められた。また研修内容がわかりやすい、学習ニーズに合致していると回答する者の割合は高く、実践への適用に関する評価も全体的に高かった。

今後、プログラム受講後の継続フォローアップとして、平成 27 年 1 月から月 1 回、血液内科病棟での定期カンファレンスを実施し、抑うつ状態の患者のアセスメントとケア方法についてのコンサルテーションを実施しており、実践への適用について評価し、教育プログラムの内容を精練していく予定である。

2. 今後の課題、展望

教育プログラムの内容を多領域の看護実践に応用できるように、プログラムを受講した看護師への教育的支援の継続と評価を行っていくことが今後の課題である。

表1 抑うつ状態にある患者をケアする看護師への教育プログラム内容

	学習目標	学習内容	学習方法
1	がん患者の通常の心理的 反応、および適応障害、 うつ病が理解できる	①抑うつ状態の理解と アセスメント	講義
2	患者の抑うつ状態とその 重症度がアセスメントで きる		講義
3	患者の抑うつ状態の重症 度に応じたケアが理解で きる	②抑うつ状態にある 患者のケア	講義・ロールプレイ
4	患者との関係づくりや効 果的な看護援助を提供す るために必要なコミュニ ケーションスキルが習得 できる。	③アサーションと 傾聴のスキル ④ロールプレイ	講義・ロールプレイ

遺伝性腫瘍患者・家族に対する 看護支援の開発に関する研究

武田 祐子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
高畑 和恵 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、QOL向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

- 1) 臨床遺伝看護分野の継続教育プログラムの開発 (研究代表者: 中込さと子 山梨大学)
- 2) 消化管良性多発腫瘍好発疾患の医療水準向上のための研究 (研究代表者: 石川秀樹 京都府立医科大学)

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) については、John M.Keller が提唱する「A R C S モデル：(Attention) (Relevance) (Confidence) (Satisfaction)」に基づき、遺伝看護学的な看護実践活動に関する看護職者の学習意欲を分析し、また学習課題を明確にすることによって、学習意欲を高める教育プログラムを作成することを計画した。今年度は、周産期・新生児領域の看護職者に焦点を当てた内容の検討を行い、次年度以降に成人（筋神経疾患、がん）に領域を広げていく。
- 2) については、消化管良性多発腫瘍好発疾患の科学的根拠を集積・分析するとともに、診療の実態把握を行い、医療水準の向上を図ることを目的としているが、指定難病の認定に向けて市民公開シンポジウム（2016年1月31日）を開催した。シンポジストは、患者会の代表、本疾患の専門医師、医療経済の専門家、マスコミ関係者であったが、約90名の参加があり、家族性大腸ポリポーシスの疾患・治療に伴う身体的・精神的・社会的・経済的負担が浮き彫りにされ、指定難病認定の必要性が確認された。患者会代表は、共同で実施してきた医療費調査の結果をまとめて発表した。

2. 今後の課題、展望

2016年8月に開催される2016 ISONG World Congress において Developing the continuing education program of clinical genetic and genomic nursing for Advanced practice registered nurse in Japan を教育セッションで発表予定である。

医療費調査の結果



平成27年度 難治性疾患政策研究事業
公開シンポジウム
難治性大腸ポリポーシス患者会
ハーモニーライフ、ハーモニーライン、メール・アルミニウム共催
日本家族性腫瘍学会後援

消化管良性多発腫瘍好発疾患の医療水準向上に向けて 大腸ポリポーシスの指定難病認定を目指す

2016年
日時 1月31日(日) 13:00-16:00
会場 慶應義塾大学病院2号館11階大会議室
〒160-8542 慶應義塾大学慶應義塾309号(www.hosp.keio.ac.jp/keio1/18中央・数館) (徒歩約15分) 地下鉄 有明駅 徒歩約15分(地下鉄有明駅下車(A1乗出口)、徒歩約5分)

難治性大腸ポリポーシスについての概要
協賛大夫 埼玉医科大学総合医療センター 客員教授

シンポジウム
進行-石田秀樹 京都府立医科大学特任教授 膵臓科 慶應義塾大学医学部消化器科教授
シンポジスト:
難治性大腸ポリポーシス患者会代表 石田秀樹 埼玉医科大学総合医療センター消化管・一般外科教授
伊藤達哉 東北大学大学院医学系研究科/医学部公衆衛生学専攻公共健康医学講座講師
難治性太郎 新日新科学医療部記者
※事前登録は不要です。どなたでもご参加いただけます。

実行協力
慶應義塾大学医学部腫瘍学専攻/大腸腫瘍学マシゲル研究室
E-mail: lab@phs.keio.ac.jp
TEL: 03-5263-5566

シンポジウムポスター

3. 2015年度の業績

1. 武田祐子, 三須久美子: BRCA 遺伝子変異保持者の挙児希望に対する対策, 産科と婦人科, 2015.82(6), 633-638
2. 武田祐子: 家族性腫瘍コーディネーター・家族性腫瘍カウンセラー制度, 家族性腫瘍学—家族性腫瘍の最新研究動向—, 2015.569-573, 日本臨床社
3. 武田祐子: がんの医療の診療体制やスタッフ間の連携 (遺伝性腫瘍の診療における看護師の役割), 新井正美 編著, がんの遺伝医療, 2015.196-198, 南江堂
4. 武田祐子: 多職種で支える家族性腫瘍, 家族性腫瘍. 2015.15(1), 21-23
5. 武田祐子: 映像による "経験" のわかちあい 遺伝性のがんに関する授業での取り組み DVD の視聴による体験者の語りからの学び, 聖路加看護学会誌, 2015.18(2), 42-44
6. 武田祐子: がんの遺伝カウンセリング, がん看護, 2015.20 (5), 565-569
7. 武田祐子, 他 3 名: 遺伝性のがんとケア (1) 家族性大腸腺腫症, がん看護, 2015.20 (6), 661-665
8. 村上好恵, 武田祐子, 他 2 名: 遺伝性腫瘍の医療において看護師が担う役割, がん看護, 2016.21 (1), 76-79

1. 経口抗がん薬治療を受ける患者の
アドヒアランスに関するケアの開発 (RCT)
2. 乳がん患者の化学療法誘発性認知機能障害に対する
ヨガを用いた活性化プログラムの開発
3. 上部消化管術後障害をもつがん患者の活力と
QOL 向上をめざすリハビリテーション開発
4. 若年女性がん患者の妊孕性温存に関する
意思決定支援統合ケアモデルの開発

小松 浩子 慶應義塾大学看護医療学部 教授

矢ヶ崎 香 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

がん患者中心の最善のケアの提供を目指し、看護実践の開発、実践への適用、普及を推進する。

B. 計画および実施過程

1. 多施設共同研究による「経口抗がん薬の服薬自己管理支援プログラムの有効性：ランダム化比較試験と質的研究による Mixed Method」の調査を推進する。併せて、Study protocol の論文を投稿する。
2. 「化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発」の feasibility study を投稿する。
3. 「胸部食道がん患者の術後機能回復促進プログラム (STEP プログラム) 開発と feasibility study」の論文文化を進め、投稿する。
- 4 - 1. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」に関する看護師を対象にした調査は、分析を進め、論文文化を進める。
- 4 - 2. 上記の調査のうち、患者を対象にした調査に関しては研究計画書作成等、調査の準備を進める。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1. RCT の研究は 3 つの研究協力施設で調査を開始した。現在、40 名の参加登録が得られた。計 200 名の登録を目指し、データ収集を継続する。
Study protocol は、論文「Effects of a nurse-led medication self-management programme in cancer patients: protocol for a mixed-method randomised controlled trial」を BMC Nursing に投稿し、採択された。
2. 「化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発：feasibility study」では、化学療法による主観的に認知機能障害を自覚している乳がん患者 21 名を対象にヨガを用いたプログラムを適用し、1 ヶ月後、2 ヶ月後に質問紙調査を行った。
認知的倦怠感が有意に改善したことと、本プログラムを適用した乳がん患者に有害事象などは生じることはなく、安全であることも明らかになった。論文「A self-directed home yoga programme for women with breast cancer during chemotherapy: A feasibility study」を International Journal of Nursing Practice. に投稿し、採択された。

3. 食道がん患者を対象にした STEP プログラムの開発と feasibility study は、食道がん患者を対象に STEP プログラムを適用し、手術後 6 ヶ月まで縦断的にデータ収集を行った。結果は、論文「Nurse Counseling for Physical Activity in Patients Undergoing Esophagectomy」にまとめ、投稿を行った。現在、査読中である。

4-1. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」に関する看護師を対象にした質的研究は分析結果を論文にまとめ、投稿を終えた。

4-2. 上記研究課題のうち、患者を対象にした調査は「乳がん女性の妊孕性温存に関するカウンセリング(情報提供、相談支援)」として、妊孕性の相談を受けた乳がん女性を対象に質的研究を計画した。IRB の承認は得た。半構造化質問紙を用いた個別インタビューによりデータ収集を開始する。

2. 今後の課題、展望

研究計画、調査実施、論文作成を切れ目なく遂行できるように計画的に進め、がん看護の改善、発展を目指して国際的にも広く発信する。

3. 2015 年度の業績

【受賞】公益財団法人 SGH 財団 佐川看護特別賞 小松浩子

【学術論文】

1. Komatsu H, Yagasaki K, Yamaguchi T. Effects of a nurse-led medication self-management programme in cancer patients: protocol for a mixed-method randomised controlled trial. BMC Nurs. 2016. 8;15:9. doi: 10.1186/s12912-016-0130-1.
2. Komatsu H, Yagasaki K, Yamauchi H, Yamauchi T. Patients' Perspectives on Creating a Personal Safety Net During Chemotherapy. Clin J Oncol Nurs. 2016. 1;20 (1):13-16.
3. Komatsu H, Yagasaki K, Yamauchi H, Yamauchi T, Takebayashi T. A self-directed home yoga programme for women with breast cancer during chemotherapy: A feasibility study. Int J Nurs Pract. 2015. 7. doi: 10.1111/ijn.12419.
4. Yagasaki K, Komatsu H. Inner Conflict in Patients Receiving Oral Anti-cancer Agents: A Qualitative Study. BMJ Open. 2015. 14;5(4):e006699. doi: 10.1136/bmjopen-2014-006699.
5. Sakuramoto H, Subrina J, Unoki T, Mizutani T, Komatsu H. Severity of delirium in the ICU is associated with short term cognitive impairment. A prospective cohort study. Intensive and critical care nursing, 2015. 31(4):250-257.
6. 大坂和可子, 川端愛, 細田志衣, 大畑美里, 矢ヶ崎香, 細川恵子, 我妻志保, 金井久子, 小松浩子. 乳がん女性を対象とした継続型サポートグループの評価 -参加者満足度と居心地のよさに影響する要因- 聖路加看護学会誌 2016. 19(2), 46-53.
7. 鈴木久美, 林直子, (5名略), 小松浩子. 乳がん体験者との協働による乳がん啓発教育プログラムの開発と評価. 保健の科学. 2015. 57(9),638-643.
8. 林直子, 鈴木久美, (4名略), 小松浩子. 子育て期の女性および乳がん体験者が考える乳がん検診の受診を促進する要点. 保健の科学. 2015. 57(8), 567-573.
9. 榎原直喜, 東尚弘, (5名略), 小松浩子, 的場元弘がん患者の疼痛の実態と課題 外来 / 入院の比較と高齢者に焦点をあてて. Palliative Care Research 2015.10(2), 135-141.



佐川看護特別賞

超高齢社会に求められる高齢者支援方法の開発

太田 喜久子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
増谷 順子 首都大学東京健康福祉学部 助教
真志田 祐理子 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

高齢者の健康増進と、QOLの維持・向上を目指した支援方法を開発し、実践の場への適用と普及に向けた取り組みを行う。

B. 計画および実施過程

1. 高齢者施設の看護・介護職を対象とした園芸活動の研修プログラムの試み
2. 介護ロボット開発と評価に関わる研究

慶應義塾スーパーグローバル事業の一環である「慶應義塾クラスター研究推進プロジェクトプログラム（長寿）」の補助を得て、平成27年度より理工学部、医学部の研究者と共同で介護機器開発とその評価に関わる研究を始動した。産学連携を図り、次年度も引き続き研究を推進していく。

C. 目標達成状況

以下、1) 高齢者施設の看護・介護職を対象とした園芸活動の研修プログラムの試みについての活動を中心に報告する。

1. 研究実践活動

- 1) 高齢者施設の看護・介護職を対象とした園芸活動の研修プログラムの試み

看護・介護職を対象とした園芸活動研修プログラムを開発し、高齢者施設に勤務中の看護・介護職員13名を対象に園芸活動研修プログラムを実施した。結果、「研修は役に立つ内容であった」との回答が得られ、研修後に施設内で園芸活動を行っていききたいとの回答も得られた。研究成果の一部は、SFC Open Research Forum 2015にて報告した。

2. 今後の課題、展望

- 1) 園芸活動研修プログラムを精練し、園芸活動の認知症ケアへの普及に向けた取り組みとして、今後も研修の機会を継続していく。

3. 2015年度の業績

- 1) 増谷順子, 太田喜久子: 施設高齢者の園芸活動を支援した職員の意識・行動変化, 人間・植物関係学会誌, 15(1), 19-24, 2015.

がん患者へのマインドフルネス認知療法 介入に関する効果研究

朴 順禮 慶應義塾大学看護医療学部 教授
瀧田 結香 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

サイコオンコロジーの視点からがん患者への効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進すると共に、医療や社会へ心のケアの実践と普及を目指す。

B. 計画および実施過程

- 1) がん患者に対するマインドフルネス教室の有効性について、ランダム化比較試験および質的研究の実施
- 2) マインドフルネスに関するワークショップ等の実施
- 3) 医療者のメンタルヘルス研修へマインドフルネスを導入

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 効果研究：RCTを開始し、予定サンプルサイズの半数相当まで介入が終了した。引き続き研究を推進していく。
- 2) ワークショップの実施：第15回日本認知療法学会「マインドフルネス認知療法」、第28回日本サイコオンコロジー学会「がん患者に対するマインドフルネス・スキル入門」を開催した。各ワークショップともに参加者から好評価を得た。
また、ORFにおいてセッション「自分と他者へのマインドフルネス」を開催し、56名の方がマインドフルネスを体験された。
- 3) 医療者自身へのマインドフルネス活用：大学病院の新人看護師や臨床指導ナースのメンタルヘルス研修の中で、マインドフルネスのレクチャーを行った。
がんプロフェッショナル養成基盤推進プランー 緩和ケアワークショップ「マインドフルネス 指導者養成コース(全4回)」の企画等コーディネートに関わった。

2. 今後の課題、展望

研究の遂行および医療者への普及。成果については論文投稿を行っていく。

3. 2015年度の業績

「不安障害に対するマインドフルネス認知療法の効果検証：preliminary study 第2報」二宮朗、佐渡充洋、朴順禮、藤澤大介、佐藤寧子、猪飼紗恵子、中川敦夫、高橋智子、新井万佑子、三浦有紀、山本和広、石原智子、田淵肇、白波瀬丈一郎、三村將、第111回日本精神神経学会学術総会 .2015. 6

肺高血圧症患者の精神状態・QOL と その関連因子に関する研究

瀧田 結香 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

特発性肺動脈性肺高血圧症（I P A H）患者および慢性肺血栓性肺高血圧症（C T E P H）患者の精神状態（抑うつ・不安）、QOL、ケアニーズとその関連因子を横断的に明らかにするとともに、治療開始前の初診患者に対しては発症後2年間の精神状態、QOL、ケアニーズを縦断的に調査して予後不良やQOL悪化に関連する予測因子を明らかにし、治療時期に応じた最良の看護実践を開発し提供する。

B. 計画および実施過程

メンバー：【看護医療学部】瀧田 結香

【医学部】片岡 雅晴、川上 崇史（循環器内科）、藤澤 大介（精神神経科）

- 1) うつ・不安の状態と身体症状ならびにスピリチュアルな側面を含む QOL の状態を以下の尺度を用いて調査する。
 - ・抑うつ状態：Patient Health Questionnaire (PHQ-9)
 - ・不安状態：Generalized Anxiety Disorder (GAD-7)
 - ・身体症状ならびにスピリチュアルな側面を含む QOL：
Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual Well-Being (FACIT-SP)
 - ・全般的 QOL：MOS-Short form 12 (SF-12)
 - ・精神疾患有病率：Mini-International Neuropsychiatric Interview (M.I.N.I) 精神疾患簡易構造化面接法
- 2) インタビューガイドをもとに半構造化面接を行い、患者が抱く思いや日常生活上の苦痛およびニーズを明らかにする。
- 3) 治療開始前の対象者は、初回調査後6か月後、1年後、2年後にも上記1) 2)の調査を継続的に実施する。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

上記の調査を開始するため、医学部倫理審査委員会に倫理審査の申請を行った。

2. 今後の課題、展望

倫理審査終了次第予備調査ならびに本調査を開始する。

「先導ナースの養成プログラム」の開発・検証

小池 智子 慶應義塾大学看護医療学部准教授

A. 目標

本部門は、看護サービスの開発・質改善を担う「ベストプラクティス先導ナース」に必要な力を高めるための、①プログラム、教材の開発、②教育・研修の提供、③効果の検証、④成果の発信を行っている。これまで開発・実施してきた2つのプログラム「ベストプラクティス導入・活用プログラム」、「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」の検証の他、新たに「レジリエンスの高い看護職養成プログラム」の開発を計画し、内容・方法についての基礎的検討を行う。

B. 計画および実施過程

1. ベストプラクティス導入・活用プログラム

・2014年度までの評価を踏まえ参加者が、①組織内外の最高の成果を出している実践例（ベストプラクティス）を見つけ、②自らの組織との差異を分析して改善案を立案・計画し、③適切な目標・評価指標（プロセス評価・アウトカム評価）を設定しモニタリングしながら通年で改善活動が行えるよう、プログラム内容を改定した。

2. ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム

・ケース教材の改定、今日的な看護マネジメント課題を素材にしたケース教材の開発を行った。
・開発したケース教材を用いた授業・研修を提供した。また効果の検証を行った。

3. レジリエンスの高い看護職養成プログラム

・プログラム開発のための基礎的検討を行った。

C. 目標達成状況

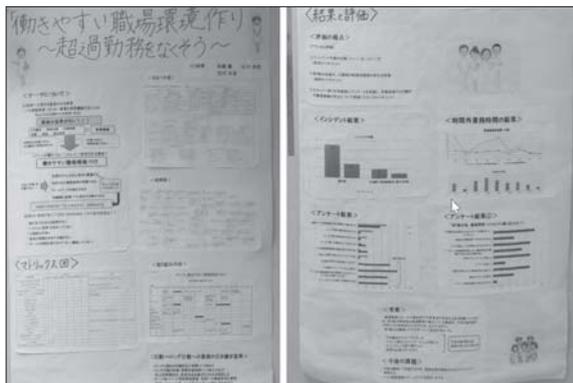
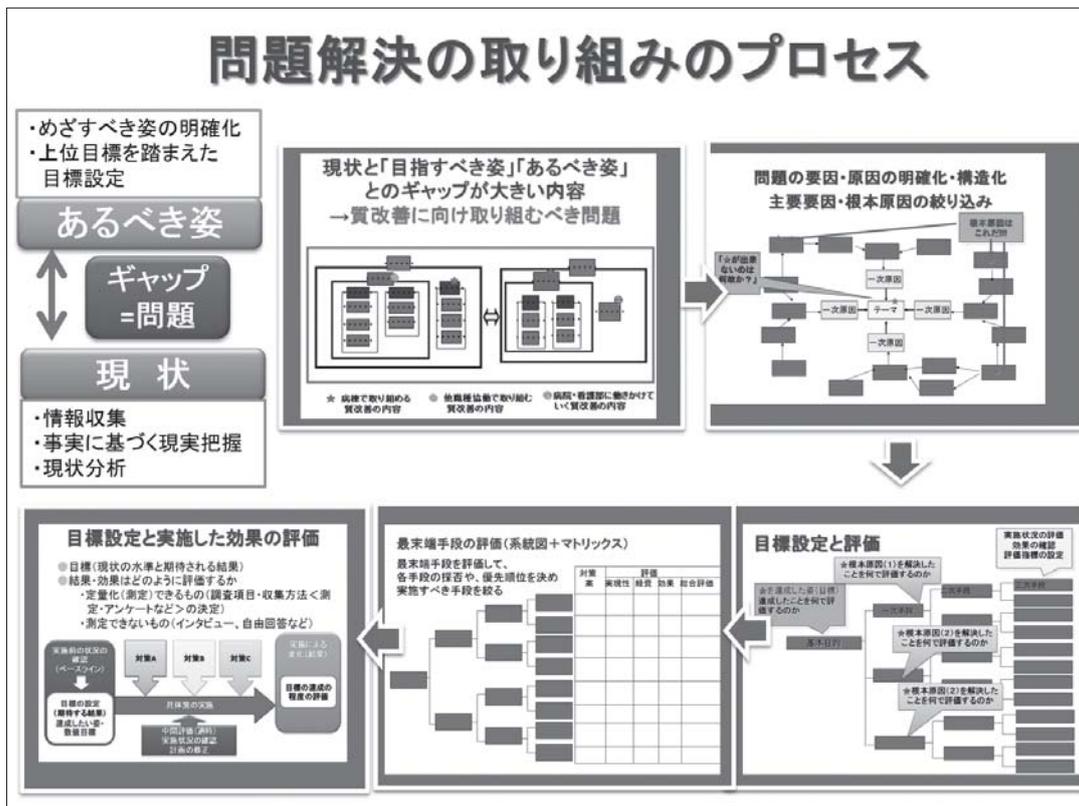
1. 研究実践活動

1) 「ベストプラクティス導入・活用プログラム」の実施と評価

2つの認定看護管理者教育課程の他、3医療機関に対して改定した研修プログラムを提供した。2医療機関、24部署が通年で、医療安全・感染管理・看護サービス等に関する改善活動に取り組んだ。

24部署の活動評価（中間・成果発表、成果資料）を分析した結果、前年度に比して、①ベストプラクティスの探索、②プロセスをモニタリングし修正しながら改善活動を実施、②改善目標の達成ができた部署が増加していることがわかった。一方、部署内で高い成果を得たベストプラクティスを組織全体で共有する仕組みや、複数部門の協働による改善活動については課題が残った。

問題解決の取り組みのプロセス



2) 「ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム」

＜ケース教材の検討・開発＞：これまでに開発したケース教材について、制度改革等の医療環境の変化を反映した内容に改定した。また、新たに以下のケース教材を開発した。

①看護管理者の課題に関連したケース：マネジメントの専門家チームと医療・在宅ケアの看護マネジメントに有用な理論と手法について検討・組織行動と意思決定に焦点を当てた2つのケース教材を作成した。

②行政保健師の能力開発に資するケース：住民検診や健康相談におけるコンフリクト・マネジメントに関するケース教材を検討した。

＜ケース・メソッド教育による授業・研修の実施＞：開発したケース教材を使用し、大学1ヶ所、大学院（管理・政策分野）3ヶ所において、ケース・メソッド教育を用いた授業を行った。また、認定看護管理者教育課程のファーストレベル4ヶ所、セカンドレベル3ヶ所、サードレベル1ヶ所、職能団体研修会2ヶ所においてケース・メソッド教育による研修を行った。受講者背景をふまえて達成目標を設定し、事前準備通知（予習）・導入説明・グループ討議・クラス討議・ケースに関連した講義等の構成を工夫した。

<評価・効果検証>：授業・研修終了後、授業計画と受講者評価（内容方法、習得・達成内容等）を分析し、ケースメソッド教育の研究者グループと改善点等を検討した。本プログラムについて、9割以上がマネジメントを学ぶ上で「効果的である」と評価し、「クラス討論で発言できなかったが、討論を聞いて視野が広がり深く考えることができた」等の効果を認識していることが分った。一方で、40人を越える研修では、学びの質を高めるために構成・運営を改善することが課題である。

3. 「レジリエンスの高い看護職養成プログラム」の開発のための基礎的検討

看護職員の労働の質改善およびレジリエンスの研究にかかわる研究者へのヒアリングを行い、医療介護現場に従事する専門職者の現状を整理し、レジリエンス研修の内容と実施上の課題を検討した。レジリエンス関連要因のひとつであるキャリアコミットメント、組織コミットメントに着目し、退職した看護職員について調査し分析をおこなった。

2. 今後の課題、展望

「ベストプラクティス導入・活用プログラム」と「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」は、効果の検証を行い内容の改善をすすめるとともに、普及に向けた活動（ワークショップ、テキスト作成など）を行う。

「レジリエンスの高い看護職養成プログラム」は基礎的検討をもとに、専門チームでプログラム開発をすすめる。

3. 2015年度の業績

- ・加藤恵里子, 鎮目美代子, 小池智子：看護師の退職理由および再就業に関わる要因の分析, 第19回日本看護管理学会学術集会（福島県）, 2015.8.
- ・Tomoko Koike (2015): Comprehensive Strategy for Dementia Prevention and Care in Japan. UCS Conference, Ipswich, UK. (2015.9.)
- ・小池智子:看護師の離職とキャリアマネジメント, 第3回日本私立大学連盟医療系学部長等委員会（東京）, 2015.10.

臨床倫理における看護師の役割と 支援システムの構築

宮脇 美保子 慶應義塾大学看護医療学部 教授

A. 目標

・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

臨床倫理における看護師の役割を質的研究により明らかにする。

B. 計画および実施過程

・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

- 1) チーム医療の中で看護師に求められる倫理的役割に関する文献検討。
- 2) チームに医療において、看護師が果たす倫理的役割に関する情報収集のための海外視察。
- 3) 研究課題についてのインタビュー調査およびデータ分析。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

- 1) 2015年9月、倫理コンサルテーションシステム構築に向けての情報収集および意見交換を目的に、米国 MedStar Washington Hospital の Center for Ethics を訪問し、臨床倫理回診に同行した。
- 2) 学会活動の一環として、「病院倫理委員会コンサルタント連絡会議」のメンバーとして倫理コンサルテーションシステム構築のための準備にかかわった。
- 3) 研究課題について、看護師を対象にインタビュー調査およびデータ分析を行った。
- 4) 臨床倫理のあり方について検討している病院における講演活動。

2. 今後の課題、展望

・倫理コンサルテーションシステムの構築

- 1) 研究課題についてのインタビュー調査およびデータ分析の継続。
- 2) 倫理コンサルテーションシステム構築に向けての活動。
- 3) ケアの倫理に関する論文執筆。

3. 2015年度の業績

- 1) 宮脇美保子:看護実践におけるユーモア活用のエビデンス, (深井喜代子編:ケア技術のエビデンスⅢ)へるす出版, pp59-71, 2015.
- 2) 宮脇美保子:「看護実践とケアの倫理」関東医学哲学・倫理学会例会 2015/10/03



MedStar Washington Hospital Center



Evan G. DeRenzo, Ph.D.(The woman in the middle of the picture)
Assistant Director Center for Ethics Editor-in-Chief Journal of Hospital Ethics

ケアリング文化の醸成 - 教育におけるユマニチュードの導入

宮脇 美保子	慶應義塾大学看護医療学部	教授
福井 里佳	慶應義塾大学看護医療学部	准教授
伊藤 麻美	慶應義塾大学看護医療学部	助教
小林 梢	慶應義塾大学看護医療学部	助教
古市 朋子	慶應義塾大学看護医療学部	助教

A. 目標

・ケアリング文化の醸成

患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施過程

・ケアリング文化の醸成

人と人の関係性を築くことを理念とする「ユマニチュード」の理解を深め、教育・実践の場に浸透させていく

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

・ケアリング文化の醸成

1) 患者 - 看護師間のケアリング関係に求められるユマニチュードの理念およびケアの原則を基礎看護学分野における看護技術教育(1年生)への導入を試みた。

① 学生は、ユマニチュードの理念および原則について講義を受けた。

② 学生は、患者一看護師役割を通して、看護技術を学ぶ最初の演習時間に、4年生のSA(大和田、滝澤、宮島)が実施した看護師が患者のケアにおいてユマニチュードを用いた場合とそうでない場合のデモンストレーションを見た後、患者の立場からその違いについて考えた。

③ 学生は、ユマニチュードの考え方を意識して、学内演習にとりくんだ。

2. 今後の課題、展望

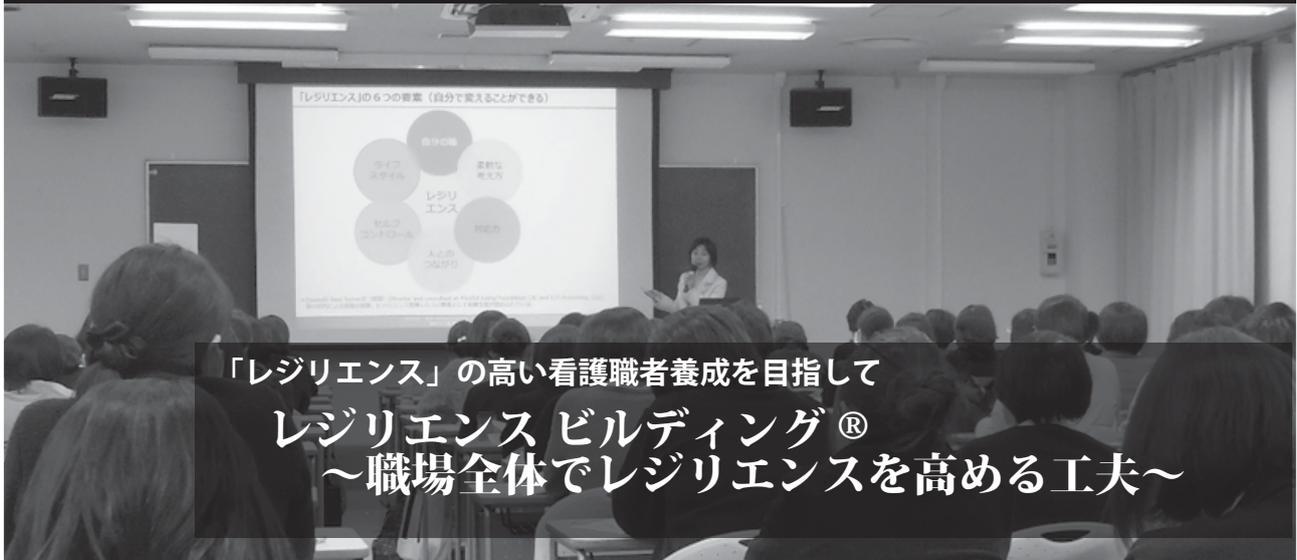
・ケアリング文化の醸成

1) ユマニチュードの基礎看護教育への導入およびその効果に対する実証的研究

3. 2015年度の業績

1) 福井里佳:「看護学実習における大学教員の問いかけにより展開される学生との対話の様相」35回日本看護科学集会、2015/12/06

2015年度 看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリ セミナー報告



「レジリエンス」の高い看護職者養成を目指して
レジリエンスビルディング®
 ～職場全体でレジリエンスを高める工夫～

日時：1月22日（金）
 18：00～19：30
 会場：慶應義塾大学信濃町キャンパス孝養舎 202 教室
 講師：市川佳居（博士・医学）
 ピースマインド・イーブ株式会社
 国際 EAP 研究センター センター長 取締役副社長

I. セミナー目的

現代社会は、経済の変動や組織内の改革、予測できないリスクなど、多岐にわたる「変化」にさらされている。このような時代には、業務上のスキルだけでなく「変化に柔軟に対処できる力」が必要であり、変化を糧に成長していく人づくりと、組織づくりが求められている。本セミナーでは、多くの企業・機関等において人と組織の回復力を強化する「レジリエンスビルディング」をサポートしてきた市川佳居氏を講師に招き、レジリエンスの理論とこの力を高めるためのアプローチについて話をうかがった。なお、本セミナーは慶應義塾大学病院看護部との共催で開催した。

II. セミナーの概要

1. レジリエンスとは何か？

レジリエンスは、「挫折やつらいことがあっても、速やかに回復できる能力」をいう。跳ね返す強さではなく、一旦は受け入れ、しなやかに対応することを意味している。変化にあふれる現代においては、周りの変化に振り回されないで、自分をしっかり保つことができる人、その場に応じて柔軟な対応ができる人、すなわち、自己復元力が強い人の存在が不可欠だ。このため、リーマンショック以降の金融界をはじめ大きな変化に直面している多くの企業や大学等で、「人と組織のレジリエンス強化」の取り組みが導入されはじめている。

2. レジリエンス・アセスメント

「レジリエンス」は練習によって向上する。市川氏は、人々がレジリエンスを高める方法を習得し計画を立て実践するための「レジリエンスビルディング®」プログラムを開発し、企業等に提供してきた。レジリエンスビルディング®は、30年のレジリエンス研究を基盤に、認知行動療法、ポジティブ心理学、PTG（心的外傷後の成長）研究の手法を統合したプログラムであるので、これは英国のE. ターナー氏らが開発したレジリエンス強化トレーニングを、日本人向けに再構成したもので、効果検証がされている。

このプログラムは、①レジリエンスの6つの重要な構成要素（自分の軸、柔軟な考え方、対応力、人と

のつながり、セルフコントロール、ライフスタイル)を理解し、②6構成要素のアセスメントツールでレジリエンスを評価、③自身のレジリエンスの「強み」・「弱み」を把握し、④「強み」をさらに伸ばし「弱み」を改善するアクションプランを作成し ⑤多様性や変化への適応力、問題対処能力の向上をめざすというプロセスですすめられる。

3. レジリエンスの6要素と高めるヒント

セミナー参加者は6要素の質問表に回答し、レジリエンス・レーダーチャートで自分自身の「強み」と「弱み」の特徴を確認し、その後、レジリエンスの6要素それぞれの特徴と、これらを高めるための基本的なアプローチやエクササイズの方法について学んだ。

4. 導入組織の事例

レジリエンス・プログラム導入事例として、某企業の従業員のウェルビーイングと活力を維持向上するためのプログラムが紹介された。

5. 会場からのコメント

職場看護職員のレジリエンスを調査した参加者から、研究結果の紹介があった。また、臨床現場の教育において、スタッフに対して、日常的にレジリエンスを高める関わりや働きかけが必要だ等の意見が交わされた。

III. 参加者からのフィードバック

セミナーには大学病院看護部45名、他の医療機関の看護職6名、看護医療学部教員20名、学生5名の合計76名が参加し、70名からアンケートの回答を得た(回収率92.1%)。

1. 回答者背景

回答者の背景は、女性67名(95.7%)、男性3名(4.3%)で、年齢は、20歳代5名(7.1%)、30歳代18名(25.7%)、40歳代30名(42.9%)、50歳代以上16名(22.8%)、職業は、看護師47名(67.1%)、教員18名(25.7%)、学部生・大学院生5名(7.1%)であった。

セミナーを知ったのは、チラシ35名(50.0%)、知人の紹介16人(22.9%)、メール9名(12.9%)、その他(師長主任会、学部会議等、上司のすすめ等)15名(21.4%)だった。

2. セミナー内容について

表1 レジリエンスについて

	全体 (%)	看護職	教員	学生
よく知っていた	2 (2.9)	0 (0.0)	2 (11.1)	0 (0.0)
大凡知っていた	21 (30.0)	6 (12.8)	12 (66.7)	4 (80.0)
よく知らなかった	21 (30.0)	16 (34.0)	4 (22.0)	1 (20.0)
全く知らなかった	26 (37.1)	25 (53.2)	0 (0.0)	0 (0.0)

表2 今後の参考になったか

	全体 (%)	看護職	教員	学生
とても参考になる	47 (67.1)	26 (55.3)	16 (88.9)	5 (100)
少し参考になる	17 (24.3)	15 (31.9)	2 (11.1)	0 (0.0)
どちらともいえない	1 (1.4)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
参考にならない	3 (4.3)	3 (6.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
未記入	2 (2.9)	2 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)

3. セミナーの感想

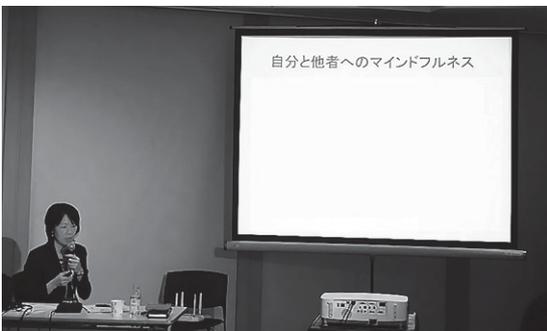
- ・6つの要素で自分を客観的に見て、対策の立て方など具体的にわかって学びとなった。
- ・自分の行動変容のヒントを得る良い研修だった。
- ・具体例をもう少し聞きたかった。

4. 看護ベストプラクティス研究開発・ラボへ期待することなど

- ・これからもこのような機会があったら参加したい。
- ・学生にもこのような機会を積極的に発信していただきたい。

看護ベストプラクティスセッション報告

自分と他者へのマインドフルネス



日時：2015年11月20日(金) 14時00分～15時30分
 場所：東京ミッドタウン タワー4F room 3+4
 朴 順禮(慶應義塾大学看護医療学部 専任講師)
 佐渡 充洋(慶應義塾大学医学部 専任講師)
 瀧田 結香(慶應義塾大学看護医療学部 助教)

プログラム：

1. マインドフルネス簡単な概要と活用について
2. 自分と他者へのマインドフルネス コンパッションの活用
3. エクササイズ1 ボディースキャン
4. エクササイズ2 マインドフルネス瞑想
5. エクササイズ3 3分間呼吸空間法

慶應義塾大学 SFC Open Research Forum (ORF) において「自分と他者へのマインドフルネス」をテーマにセッションを開催致しました。看護医療学部や SFC の学部生をはじめ、子育て中の主婦や人事担当のビジネスマンなど医療関係以外の分野からも多くの方にご参加いただき、総勢 56 名の方がマインドフルネスを体験されました。

マインドフルネスとは？

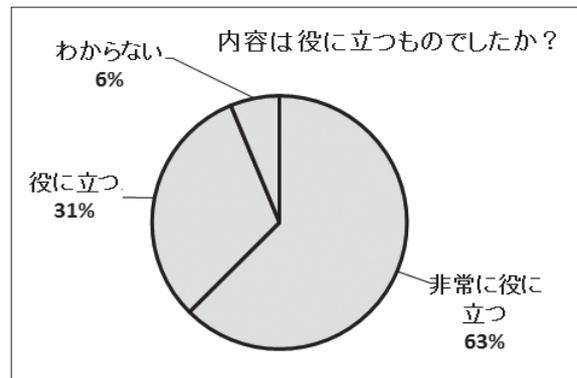
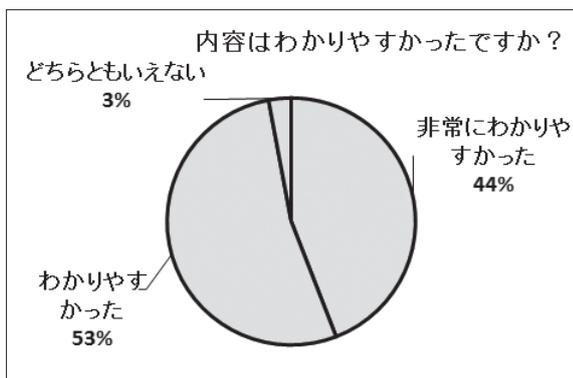
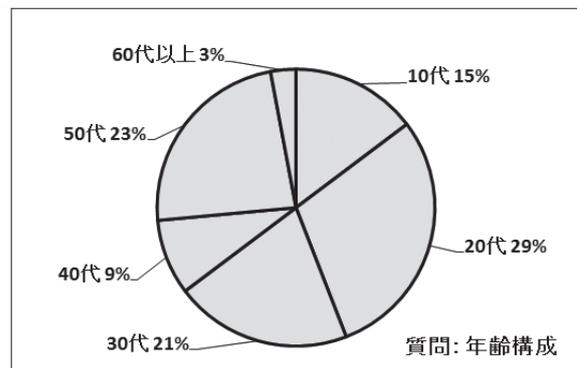
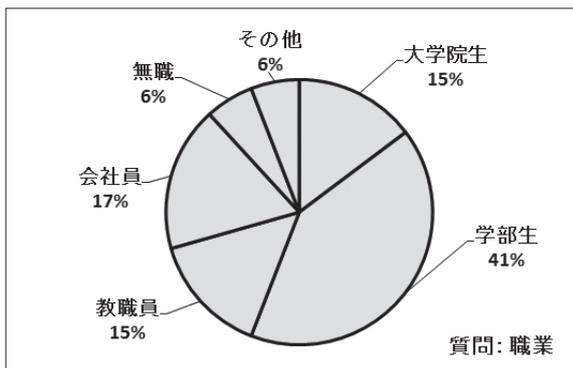
マインドフルネスとは、“今ここで価値判断することなく注意を向ける心のトレーニング”であり、マインドフルネスの実践が他者を思いやることにつながるとも言われております。

セッションでは、脳科学的な観点を踏まえたマインドフルネスの概要が説明され、その後いくつかの瞑想が実際に行われました。

マインドフルネス瞑想と体験のシェア、ディスカッションを通じて、参加者からはマインドフルネスを「日常やビジネスに取り入れたい」といった多くの声が寄せられました。

<アンケート集計結果>

参加者数：56名 アンケート回収数：34名 性別 男性 11名 女性 22名 (未回答 1名)



質問：どのような体験となったか？（一部抜粋）

- ・実際に使っていきたい、寝付けないうちにやってみたい。
- ・短い時間だったが意義深かった。
- ・ゼロ・空・無になるよりも注意を向けることでむしろ無になれるという新たな感覚をつかむことができた。
- ・根拠のある医学的な概念としてのマインドフルネスを知ることができ有意義だった。
- ・ビジネスコンサルティングに活かしていきたい。
- ・この方法を多くの人に広げていけるといいと思った。
- ・すぐには慣れるのが難しいという印象を受けたが取り入れたいと思った。
- ・今までに感じたことのない感覚だった。
- ・マインドフルネスを育児に従事する人へ活かしていきたい。

若手研究者の会（わかばの会）

小山友里江・矢ヶ崎 香（慶應義塾大学看護医療学部 准教授）
 新幡 智子（専任講師）
 伊藤 麻美, 井ノ下 心, 寛 亮子, 小林 梢, 佐藤 美樹, 仙波 美幸
 高畑 和恵, 瀧田 結香, 中尾真由美, 古市 朋子, 真志田祐理子, 緑川 綾（助教）

A. 目標

今年度は個々の研究能力の向上を目指し、3班に分かれて勉強会を企画・開催した。

B. 計画および実施過程

2015年8月 第1班企画勉強会開催「将来に向けての道しるべ」
 2015年11月 第2班企画勉強会開催「量的研究のなぜ・どうして？」
 2015年11月 ORF での活動発表
 2016年2月 第3班企画勉強会の準備中

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

第1班「将来に向けての道しるべ」

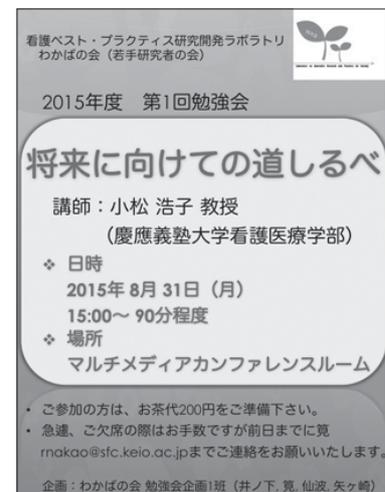
日時：2015年8月31日（月）15:00～16:30

（於 孝養舎 /SFC 中継）

講師：小松 浩子先生（慶應義塾大学看護医療学部 教授）

研究を推進するための基本の「き」として、若手研究者がどのように自律して研究を進めていくのかについて学び、実践するための示唆を得ることを目的に勉強会を行った。研究の進め方や、どのように環境づくりをするのかについて小松教授よりご講義いただいたのち、自由な形式での質疑応答・ディスカッションを行った。「研究は1日にしてならず」であり、誠実に、真理を探究する姿勢」を学び、日常の自分の姿勢や行動を内省する機会となった。

10名が参加し、自己の課題を痛感しつつも、元気と意欲と勇気が高まるような貴重な学びとなった。日頃から実践と研究と教育の循環に努めていきたい。



第1班ポスター

第2班「量的研究のなぜ・どうして? ～ありそうでなかった量的研究を検討する会～」

日時: 2015年11月27日(金) 17:00~18:30 (於 孝養舎 /SFC 中継)

講師: 大津 洋先生 (国立国際医療研究センター臨床研究センター 臨床疫学研究室長)

「量的研究の分析方法」や「統計の専門家にコンサルトする際の準備」などについて研修会を開催した。私達若手研究者の論文を用いながら、普段抱えやすい分析方法の悩みや迷いを出し合いQ & A方式で進められた。研究は計画段階からscopeを明確にし、アウトカムをシンプルに絞り込む必要があるということから、データ収集のタイミングやカットオフ値の考え方で、多岐にわたり学ぶことができた。14名が参加し、本やテキストにない知識・情報の共有とディスカッションができた等、満足度の高い内容であった。



講師の先生を囲んで

参加し、本やテキストにない知識・情報の共有とディスカッションができた等、満足度の高い内容であった。

第3班「学部教育における教育の継続性について考える

～ユマニチュードを取り入れた教育に焦点を当てて～

日時: 2016年2月29日 10:30-12:00 に開催

講師: 宮脇 美保子先生 (慶應義塾大学看護医療学部 教授)

本学部では、基礎看護学分野で「ユマニチュード」を取り入れた教育を導入している。ユマニチュードとは、ケアの対象者を物ではなく人 (Human) として尊重することで対象者が人間らしさを取り戻し (Humanity)、スタッフと対象者との間に、尊厳と信頼を構築するケアの技法 1) とされ、学生は1年次より学習している。学生が4年間を通して、それぞれの領域で学んだことを積み重ね、統合していけるよう支援していくうえで、継続的な教育の支援のあり方や効果的な教育方法等について教員間でざっくばらんにディスカッションし、考える機会としたい。



第3班活動風景

1) 本田美和子, Gineste Y, Marescotti R. (2014), ユマニチュード入門, 医学書院.

2. 今後の課題、展望

- 定期的に勉強会を開催し、研究能力の向上に努める。
- 今年度に続き、わかばの会として ORF への参加を検討する。

3. 2015年度の業績

- 2015年11月20日~21日、ORF2015にてポスター出展

The poster is titled "Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing: Challenges of WaKaBa". It features a logo with a green plant. The main text describes a workshop on quantitative research, mentioning the instructor Dr. Y. Ohtsuka and the date November 27, 2015. It also discusses the importance of human-centered education (humanity) in nursing, emphasizing respect and trust for the recipient of care. The poster includes a section for "Challenges of WaKaBa" and a list of activities for the workshop, such as "量的研究のなぜ・どうして?" and "ユマニチュード教育のあり方に関する勉強会の開催". It also mentions the "わかばの会メンバー" and provides contact information for the laboratory.

ORF 出展ポスター

